アガンベンの美学思想について

―― 美学の破壊から芸術機械の不活性化へ

京都大学　竹下 涼

本発表では、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベン（G. Agamben, 1942～ ）の美学思想を扱う。アガンベンの哲学は、近年の政治や社会の情勢も相俟って、主にその政治哲学的な側面での需要が進んできた。一方で、アガンベンが美学出身の哲学者であることもまた意識されるようになり、ここ数年ではアガンベンの美学思想を政治哲学や倫理思想へと接続するような包括的な読解の試みがなされるようになっている（Darida 2021, 2022）。今後のアガンベン研究の動向もまた彼のより多面的な活動へと向けられることとなるだろう。その手がかりの一つとして彼のキャリア初期の美学思想を理解することは、アガンベンの哲学一般を理解する上でも有益なものとなるだろう。

さて、1970 年の『中味のない人間』では、「美学の破壊」がその中心的なテーマとなっている。アガンベンは 18 世紀中葉に成立した近代美学やロマン主義の芸術観を、芸術作品の背後に芸術家の意志や創造性を見出す「意志の形而上学」であると批判する。ここでアガンベンはポイエーシス/プラクシスという古代ギリシアの概念を軸にして近代の美学思想史が、ポイエーシスを背景化しプラクシスを前景化してゆくプロセスであったことを指摘し、ポイエーシスの伝統を現在との関係で捉え直し、それを回復しようとする。そこで、アガンベンは芸術作品の根源的構造として、時間に亀裂をもたらし人間を根源的なポイエーシスの空間へと移行させるというリズム概念を提起する。

『中味のない人間』のおよそ半世紀の後、『創造とアナーキー』（2017）で再び芸術作品の問題が取り上げられる。ここでは、分析方法が美学思想史から芸術作品の考古学へと変わっている。また『中味のない人間』ではポイエーシスのもっとも疎外された形式として取り上げられていたデュシャンのレディメイドが芸術家-作品-創造行為が緊密に結びついた近代の「芸術機械」を不活性化し停止させるものとして再評価されている。ここで、近代の芸術機械と呼ばれているものは初期の著作で「意志の形而上学」の歴史として規定されていた近代美学に相当する。それを近年のアガンベンは「破壊」ではなく、「不活性化」しようとする。

アガンベンのこのような美学思想の変容について、先行研究では、『中味のない人間』で主張されていた芸術作品の根源的なポイエーシスの役割が『創造とアナーキー』ではその理論的な枠組みから決定的に消え去るのだと整理されている（Rauch 2020）。つまり、初期と現在とでポイエーシスという中心的モティーフが断絶しているというわけだが、本発表では、初期のリズム概念と近年の不活性化との役割の近接性から、アガンベンの思想に一貫したものを見出そうと試みる。